



Title	横光利一 『機械』論(二〇〇九年度卒業論文要旨集)
Author(s)	真山, 希弥
Citation	札幌国語研究, 15: 63-63
Issue Date	2010
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2536
Rights	

横光利一の『機械』には、主人公の「私」が怒りなどの感情を露にしたり、暴力を受けて痛がったりする様子が全く描かれていない。本研究では、主人公「私」の〈生の感情〉と〈肉体的な痛み〉に着目し、それらが描かれない理由を明らかにすることで、今まで注目されてこなかった『機械』の手法の新しさを見出すことをねらいとする。

まず『機械』の文体に注目し、段落ごとの平均文長を算出することで、第八段落に限って文体に「私」の感情が表れていることが分かった。そして、回想と現在の「私」の語りの違いを見出すこともできた。これを元に、語り手の視点を〈四人称〉という新たな視点と関連付けて分析し、語り手の「私」は〈生の感情〉や〈肉体的な痛み〉を表現する視点を持ち合わせてはおらず、「自意識」のみを抽出して語り進めようとしていることが分かった。さらに当時流行していた「機械主義」との関係を見ていくことで、横光はこの流行を『機械』に取り入れ、「私」の視点に「メカニズム」の要素を組み込んだことが明らかになった。

『機械』は〈四人称〉を発明工夫するための試作品ともいえ、横光は語り手に〈生の感情〉や〈肉体的な痛み〉を表現する視点を意図的に与えないことで、「自意識」のみを見つめる機械的な視点を生み出した。これが『機械』の手法の新しさである。